

「子どもの絵と巨匠たち」

市川市文化振興財団 美術専門員 森 綾子

今回は美術のお話、といっても「子どもの絵」にまつわる2人の画家のエピソードについてご紹介してみましょう。

子どもの描く絵が美術界で注目されるようになるのは、20世紀に入ってからのことです。20世紀美術の巨匠と言えば、パブロ・ピカソ（1881-1973）の名前を思い出される方も多いことでしょう。一生のうちに様々な表現方法を探求し続け、なかでも、多視点から見た形を平面上で組み合わせる「キュビズム」という芸術運動で世界中を驚かせた画家です。

スペイン生まれのピカソは、幼少時代から並はずれた絵の才能を表し、美術学校では常に上位の成績を納める優秀な生徒でした。美術教師だった父親は、息子の作品に感心してアトリエを譲り、以降、絵筆を一切持たなかったと言います。そのピカソは晩年、次のように語りました。

「私は子どもの頃、ラファエロのように描くことができた。しかし、大人になっても子どものように描くことは難しい」と。

誰もが賞賛する素質と技術を持っていたピカソにとっても、子どものように描くことは非常に難しい仕事だったのです。

スイス生まれのパウル・クレー（1879-1940）も、子どもの絵が持つ素晴らしさを発見した画家の一人です。音楽家の家庭に育ったクレーは、ヴァイオリンの得意な少年でしたが、絵を描くことも大好きで、10歳の頃からスケッチブックを持ち歩いては、街角で見つけた花や鳥や、郊外の風景などを描き続けていました。

画家の道を志し、都会に出て絵の勉強に励んでいた彼は、ある時実家で子ども時代のスケッチブックを見つけ、大きな衝撃を受けました。今の自分には描けない純粋な美しさがそこにあったからです。クレーはこれらの素描を「たか

らもの」と呼び、自分の作品目録に加えました。そして、時に「子どもっぽい」と揶揄されることもある、独自の様式を確立したのです。

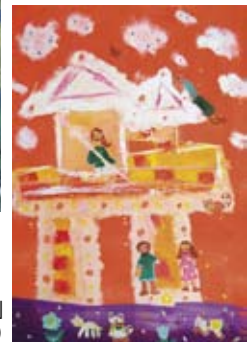
「芸術の始原は、むしろ民族学博物館か、あるいは自宅の子ども部屋で見つかるものなのです。子どもという事態そのものに、叡智がひそんでいるのです」と、クレーは語っています。

このように、子どもの絵は20世紀の画家たちにインスピレーションを与え、数々の偉大な作品に影響を及ぼしました。

市川市芳澤ガーデンギャラリーでは、4月23日（土）～5月8日（日）に「市川こどもアートフェスティバル 2011」を開催します。海外の児童画、映画『トントンゴキゴキ図工の時間』の舞台となった品川区立第三日野小学校の作品、そして市川の子どもの作品が一堂に会し、皆様には子ども達の豊かな発想力や創造力を堪能して頂けることと思います。この機会に、巨匠たちを唸らせた「こどもアート」の魅力に触れてみてはいかがでしょうか。



「満月のジャングル」
（物部千央 小学5年生）



「クッキーの家の小人家族」
（那須美佑 小学3年生）

今年度よりさまざまな財団専門スタッフが交代で執筆いたします。